

自ら進んで考えながらコミュニケーションを 図ろうとする態度を育む外国語活動の授業づくり

——「コミュニケーションスパイス」を活用した必然性のある場面設定を通して——

長期研修員 半田 敦子

《研究の概要》

本研究は、小学校外国語活動において、「コミュニケーションスパイス」を活用して、相手に伝える必然性のある場面を設定することにより、児童が自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目指したものである。目的・場面・状況等を引き立たせる「コミュニケーションスパイス」には、「相手の望み」、「実在の相手」、「英語話者」の三つの要素があり、それぞれがコミュニケーション活動における「目的意識」、「相手意識」、「英語を使う必然性」を生む。「コミュニケーションスパイス」を活用した必然性のある場面設定を行うことの有効性を授業実践を通して明らかにした。

キーワード 【外国語活動 コミュニケーションスパイス 相手意識 目的意識
英語を使う必然性 コミュニケーションの目的・場面・状況等】

群馬県総合教育センター

分類記号：G09-04 平成29年度 263集

I 主題設定の理由

社会が多文化・多言語社会といったグローバル化へと急速に進む中、将来の子どもたちは、更なる国際的な協調と競争に迫られてくる。今後、日常生活の様々な場面においても、他国の人々との関わりが求められ、互いの考えや気持ちを伝え合い、理解し合うために、外国語によるコミュニケーション能力は欠かすことができないものとなる。

現行小学校学習指導要領解説外国語活動編（平成20年8月）では、「コミュニケーションの素地を養う」ことを目標とし、全面実施から7年が経過した。しかしながら、小学校英語教育に関する調査研究報告書（国立教育政策研究所平成29年4月）によると、「コミュニケーションへの積極性」に大きな成果が見られるものの、「英語で自分のことや意見を言うこと」が楽しいと感じる児童は半数を切っている。「外国語活動が歌やゲームだけで終わってしまい、児童が自分の立場で自分の考えや気持ちを指導者や友達と伝え合うコミュニケーションにまで至っていないのではないか」という課題が挙げられている。小学校3、4年生で外国語活動の先行実施を始めて4年目になる所属校においても、「一方的に自分の思いを伝えていくに過ぎない場合が多い」とコミュニケーションの面で課題が見られる。

また、新小学校学習指導要領解説外国語活動編（平成29年6月）では、「自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地」や「相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」を養うことが求められている。外国語活動で育成を目指すこのような「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」は、小学校高学年外国語、そして中学校外国語の「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」の育成につながっている。したがって、外国語活動でも、ゲームの楽しさだけで終わらせず、自分の考えや気持ちを伝え合う必然性を感じながら英語でコミュニケーションを図る場を設定することが重要であると考えられる。

平成29年度学校教育の指針（解説）（群馬県教育委員会）でも、「自分の考えや気持ちを伝え合う場面を設定し、相手意識をもちながらコミュニケーションを図る活動」を継続して行うことが外国語活動の重点の一つとして挙げられている。単なる情報伝達にとどまらず、互いの考えや気持ちを伝え合い、理解し合うことでコミュニケーションが成立すると考えれば、授業におけるコミュニケーション活動においても、相手に配慮しながらやり取りを行うことが重要であると考えられる。

そこで、本研究では、相手のために何を伝えるべきかという目的意識、相手に合わせて分かりやすく伝えようとする相手意識、英語を使う必然性の3点を児童に意識させ、相手と円滑に関わるために自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ることができる場面を設定する。それは、英語に慣れ親しむ活動や英語を用いた体験的な活動で十分に言語材料の習得を図った後、単元末に、目的・場面・状況等を引き立たせる「コミュニケーションスパイス」を加えたコミュニケーション活動を設定することである。コミュニケーションを図る場面の目的意識、相手意識を明らかにし、英語を使う必然性が生まれると、児童は英語で何をどのように伝えたら良いかを考え、自分なりの英語で相手とやり取りを行おうとすると考える。このように目的・場面・状況等に応じて、自分の知識・技能や経験を生かし、人と円滑に関わるために、相手に合わせて分かりやすく英語でコミュニケーションを図ろうとする経験を重ねることで、自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことができると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

小学校中学年の外国語活動において、自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとする態度を育むために、「コミュニケーションスパイス」を活用した必然性のある場面設定を行うことの有効性を明らかにする。

III 研究仮説（研究の見通し）

本研究では、目的・場面・状況等を引き立たせる「コミュニケーションスパイス」を加えて場面設定したコミュニケーション活動において、自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとする態度の育成について、以下の三つの見通しに沿って見取るものとする。

- 1 「相手の望み」を設定することによって、相手の知りたいことが明らかになると、相手のために何かを伝えようとする目的意識が生まれ、既習の知識・技能や経験を生かしながら自分の考えや気持ちを伝えようとする態度を育むことにつながるだろう。
- 2 「実在の相手」を活用することによって、相手の人物像が明らかになると、その相手に合わせて分かりやすく伝えようとする相手意識が生まれ、円滑に関わることができるよう相手に配慮しながらコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことにつながるだろう。
- 3 「英語話者」を活用することによって、英語を使う必然性が生まれ、自分の知っている英語を駆使して自分なりの言葉でコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことにつながるだろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「自ら進んで考えながら、コミュニケーションを図ろうとする態度」について

本研究では、英語で伝え合う必然性のあるコミュニケーション活動を通して、「自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとする態度」を育むことをねらいとしている。児童は、人と円滑に関わるために、相手のために分かりやすく英語で何を伝えるかを自ら進んで考えながら、言葉のやり取りを行い、互いの考えや気持ちを伝え合い、理解し合おうとする。本研究では、その態度を「自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとする態度」と捉えることとする。

(2) 「コミュニケーションスパイス」について

「コミュニケーションスパイス」とは、コミュニケーション活動において、目的・場面・状況等を引き立たせ、児童が考えや気持ちを伝え合う必然性を生むために場面設定に活用する「相手の望み」、「実在の相手」、「英語話者」の三つの要素を指す。児童は、その要素から生まれた目的・場面・状況等に応じて自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとする。本研究では、授業者がそれら要素を意識して場面設定した活動を「スパイスの効いたコミュニケーション活動」と呼ぶこととする。

① 「相手の望み」について

「相手の望み」とは、相手が知りたいと思っていることを指す。相手に知りたいことがある場面を設定し、それを伝えることで、相手の望みに答え、相手に何らかの良い変化をもたらすこととなる。相手の状況から相手の望みが明らかになると、児童は既習の知識・技能や経験を活用し、何とかして相手の状況をより良くしたり、その問題を解決したりしたいと考える。そして、相手のために自分の考えや気持ちを伝えようとする。例えば、相手が引っ越してきたばかりで、これから住む地域のことをあまり知らない場合、児童は自分の知識・技能や経験から最も適切な情報や表現を選びながら、相手のために何かを伝えようとするだろう。このように、本研究では、相手のために何か喜ぶことを伝えようとすることを目的意識を持つと捉える。

その場面設定において「相手の望みが明確になっている場面」、「児童が興味を持つ、身近な生活場面」という二つの条件を整えると、児童は自分の知識・技能や経験を生かし、自分の考えや気持ちが自然に生まれ、自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとする態度が育まれると考える。

② 「実在の相手」について

「実在の相手」とは、伝える相手が実際に存在する人であることを指す。コミュニケーシ

ョンを図ろうとする実在の相手の人物像や気持ち、状況等が明らかになると、児童はその相手に合わせて分かりやすく伝えるために自分に何ができるかを考える。例えば、相手がサッカーが好きな場合、サッカーの話をつきかけに話を始めて、相手と円滑に関わろうとするだろう。もちろん、コミュニケーションを図るのにはっきりとした声、アイコンタクト、笑顔、ジェスチャーなどを用いることは重要である。しかし、全ての場面においてそれが当てはまるわけではない。相手が悲しいとき、はきはきと笑顔で話すことはできない。相手が怒っているのに笑顔で返答すれば、相手を更に怒らせてしまうだろう。このように、本研究では、目の前に実際に存在している相手の人物像や気持ち、状況等に合わせ、より円滑に関わるために伝え方を工夫することを相手意識を持つと捉える。

その場面設定において「相手の人物像が明確になっている場面」「児童にとって身近である実在の相手とやり取りをする場面」という二つの条件を整えると、相手に合わせた様々な工夫が生まれ、自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとする態度が育まれると考える。

③ 「英語話者」について

「英語話者」とは、伝える相手が日本語よりも英語の方が分かる人であり、ALTを始め学校に関わる外国人スタッフや身近な地域に在住する外国人の保護者や留学生等の地域人材を指す。英語話者の母語は必ずしも英語である必要はない。母語が英語でない人と英語でコミュニケーションを図ることは、相手の母語が何であれ英語ができれば、世界中の様々な国の人々とコミュニケーションを図ることができるという英語を習得する大きなメリットを知るきっかけにもなる。日本語が話せない、あるいは日本語よりも英語の方が分かる相手だからこそ、児童は自分の知っている英語を使って何とか自分の考えや気持ちを伝えようとするだろう。このように、本研究では、児童が英語を使わなくては相手に自分の考えや気持ちを伝えられない、あるいは英語を使った方が日本語を使うより相手に分かってもらえると感じる状況を英語を使う必然性が生まれると捉える。

その場面設定において「英語話者とやり取りできる場面」「容易な英語を用いてやり取りできる場面」という二つの条件を整えると、児童は英語を使う必然性に迫られ、自分の知っている英語を駆使して、自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとする態度が育まれると考える。さらに、児童はその体験を重ねることで、世界中の多くの人々と英語で積極的に関わる意欲や自信につながっていくと考える。

(3) 単元構成について

児童が自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとするには、その場面で用いる言語材料を聞き慣れていたり、言い慣れていたりすること、その使用場面に慣れていること、その話題や内容について児童がよく知っていることが重要である。したがって、児童が自ら進んで考えながらコミュニケーションを図ろうとする態度の育成には、スパイスの効いたコミュニケーション活動だけでなく、言語材料である英語に慣れ親しむ活動や英語を用いた体験的な活動も必要となる。

単元を構成する際、段階的にねらいを高めながら、楽しく聞いたり話したりする活動を設定することによって、児童は言語材料である英語に繰り返し触れ習得していくと考えられる。そこで、次ページの流れで単元を構成した(次ページ表1)。

表1 単元構成モデル

過程	ねらい	学習活動	活動例
つかむ ↓	○ リズムや音に慣れる。 ○ 言葉の意味を知る。	・チャンツ ・歌	・リズムボックスを使いながら取り組む。 ・映像や絵を見ながら歌う。 ・言葉の意味を表すジェスチャーをしながら歌う。
	○ 意味やイメージを捉える。 ○ 聞き慣れる。 ○ 言い慣れる。	・クイズ ・ゲーム	・穴あきクイズ ・シルエットクイズ ・ポインティングゲーム ・キーナンバーゲーム ・WOWゲーム ・伝言ゲーム
慣れ親しむ ↓	○ リズムよく、速めのスピードで言い慣れる。 ○ 聞き慣れる。	・チャンツ ・歌	・スピードに変化を付けながら取り組む。 ・チーム対抗戦にする。 ・パートに分けて歌う。
	○ 言葉の意味を知る。 ○ 表現の使用場面に慣れる。 ○ 友達と交流しながら、聞き慣れたり、言い慣れたりする。	・クイズ ・インタビューゲーム ・インフォメーションギャップゲーム	・ジェスチャーゲーム ・Who is No.1ゲーム ・時刻をたずねようゲーム

広げる

○ 目的・場面・状況等に応じて、自分の知識や経験などを生かしながら、相手により分かりやすくなるように英語でやり取りする。

<スパイスの効いたコミュニケーション活動例>

<p>「太田のことを紹介しよう」 (言語材料：ある物が何か尋ねたり、それが何か答えたりする表現)</p>	<p>「日本のおすすめのプレゼントは何だろう」 (言語材料：ほしいものを尋ねたり、要求したりする表現)</p>																		
<p>目標：保護者に太田での暮らしに役立つ場所について分かりやすく英語で伝えようとする</p>	<p>目標：ALTの弟が喜ぶ日本らしいプレゼントのアイデアを英語で伝えようとする</p>																		
<table border="1"> <tr> <td style="background-color: #ffcccc;"> <p>相手の望み ・太田ってどんなところか知りたいな</p> </td> <td style="background-color: #ffffcc;"> <p>実在の相手 ・太田に来たばかり ・運動が好き</p> </td> <td style="background-color: #ccffcc;"> <p>英語話者 ・日本語より英語の方が分かる保護者(P)</p> </td> </tr> <tr> <td style="background-color: #ffcccc;"> <p>目的意識</p> </td> <td style="background-color: #ffffcc;"> <p>相手意識</p> </td> <td style="background-color: #ccffcc;"> <p>英語を使う必然性</p> </td> </tr> <tr> <td style="background-color: #ffcccc;"> <p>太田で楽しく暮らせるようになるという</p> </td> <td style="background-color: #ffffcc;"> <p>絵や写真、地図を見せながら運動ができるところを紹介しよう</p> </td> <td style="background-color: #ccffcc;"> <p>英語で伝えてみよう</p> </td> </tr> </table>	<p>相手の望み ・太田ってどんなところか知りたいな</p>	<p>実在の相手 ・太田に来たばかり ・運動が好き</p>	<p>英語話者 ・日本語より英語の方が分かる保護者(P)</p>	<p>目的意識</p>	<p>相手意識</p>	<p>英語を使う必然性</p>	<p>太田で楽しく暮らせるようになるという</p>	<p>絵や写真、地図を見せながら運動ができるところを紹介しよう</p>	<p>英語で伝えてみよう</p>	<table border="1"> <tr> <td style="background-color: #ffcccc;"> <p>相手の望み ・弟にプレゼントを送るために、弟と同じ年代の児童がどんなものがほしいかを知りたい。</p> </td> <td style="background-color: #ffffcc;"> <p>実在の相手 ・ALTは弟と一緒に遊ぶ。 ・プレゼントを郵便で送る予定 ・弟は日本に興味がある。</p> </td> <td style="background-color: #ccffcc;"> <p>英語話者 ・日本語より英語の方が分かるALT(T)</p> </td> </tr> <tr> <td style="background-color: #ffcccc;"> <p>目的意識</p> </td> <td style="background-color: #ffffcc;"> <p>相手意識</p> </td> <td style="background-color: #ccffcc;"> <p>英語を使う必然性</p> </td> </tr> <tr> <td style="background-color: #ffcccc;"> <p>弟さんが喜ぶものって何だろう？</p> </td> <td style="background-color: #ffffcc;"> <p>実物を見せるといいかな？ 大きくないものにしよう。</p> </td> <td style="background-color: #ccffcc;"> <p>英語で伝えてみよう</p> </td> </tr> </table>	<p>相手の望み ・弟にプレゼントを送るために、弟と同じ年代の児童がどんなものがほしいかを知りたい。</p>	<p>実在の相手 ・ALTは弟と一緒に遊ぶ。 ・プレゼントを郵便で送る予定 ・弟は日本に興味がある。</p>	<p>英語話者 ・日本語より英語の方が分かるALT(T)</p>	<p>目的意識</p>	<p>相手意識</p>	<p>英語を使う必然性</p>	<p>弟さんが喜ぶものって何だろう？</p>	<p>実物を見せるといいかな？ 大きくないものにしよう。</p>	<p>英語で伝えてみよう</p>
<p>相手の望み ・太田ってどんなところか知りたいな</p>	<p>実在の相手 ・太田に来たばかり ・運動が好き</p>	<p>英語話者 ・日本語より英語の方が分かる保護者(P)</p>																	
<p>目的意識</p>	<p>相手意識</p>	<p>英語を使う必然性</p>																	
<p>太田で楽しく暮らせるようになるという</p>	<p>絵や写真、地図を見せながら運動ができるところを紹介しよう</p>	<p>英語で伝えてみよう</p>																	
<p>相手の望み ・弟にプレゼントを送るために、弟と同じ年代の児童がどんなものがほしいかを知りたい。</p>	<p>実在の相手 ・ALTは弟と一緒に遊ぶ。 ・プレゼントを郵便で送る予定 ・弟は日本に興味がある。</p>	<p>英語話者 ・日本語より英語の方が分かるALT(T)</p>																	
<p>目的意識</p>	<p>相手意識</p>	<p>英語を使う必然性</p>																	
<p>弟さんが喜ぶものって何だろう？</p>	<p>実物を見せるといいかな？ 大きくないものにしよう。</p>	<p>英語で伝えてみよう</p>																	
<p>児童の考え</p>	<p>児童の考え</p>																		
<p>会話例</p> <p>P: What's this? S: It is Ota Undo Koen. It is a big park. You can run. P: I want to go there. Thank you. S: You're welcome.</p> 	<p>会話例</p> <p>T: What do you want for a present? S: I want a kendama. T: What's that? S: It's a Japanese toy. It's fun. T: Wow, I want it, too. Thank you.</p> 																		

自ら進んで考えながら

英語でコミュニケーションを図ろうとする児童

スパイスの効いたコミュニケーション活動

実在の相手のために考え、英語で伝え合う活動

相手の望み

相手が知りたいこと

目的意識

これを伝えたら
喜ぶかな？

実在の相手

実際に存在する人

相手意識

どんなふうに
伝えようかな？

英語話者

日本語より
英語の方が分かる人

英語を使う
必然性

英語で
伝えなくちゃ！

英語を用いた
体験的な活動

英語に慣れ親しむ活動

使用場面に慣れる活動だが、自分の本当の考えや思いを伝えられない

ゲーム等の活動は楽しいが、英語で伝える楽しさは感じられない

英語で自分のことや意見を言うことはあまり楽しくない

歌やゲームで楽しそうだけどこれだけでいいのかしら

コミュニケーション活動が話すだけ、聞くだけで一方的になってしまう

V 研究の計画と方法

1 授業実践の概要

対 象	所属校 小学校第4学年 83名
実 践 期 間	平成29年10月26日(木)～11月30日(木) 15時間 (5時間×3クラス)
単 元 名	ALTのために日本のテレビ番組を紹介しよう
単元の目標	ALTのために、紹介したいテレビ番組の放送される曜日や時刻を英語で分かりやすく伝えようとする。

2 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	「相手の望み」を設定することによって、相手の知りたいことが明らかになると、相手のために何かを伝えようとする目的意識が生まれ、既習の知識・技能や経験を生かしながら自分の考えや気持ちを伝えようとする態度を育むことに有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の様子分析 ・児童の発話分析 ・紹介カード分析 ・振り返りカード分析 ・事後アンケート分析 ・授業記録ビデオ分析
見通し2	「実在の相手」を活用することによって、相手の人物像が明らかになると、その相手に合わせて分かりやすく伝えようとする相手意識が生まれ、円滑に関わることができるよう相手に配慮しながらコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことに有効であったか。	
見通し3	「英語話者」を活用することによって、英語を使う必然性が生まれ、自分の知っている英語を駆使して自分なりの言葉でコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことに有効であったか。	

3 抽出児童

A (男)	学力は高く、外国語の学習は大切だと思っている。外国語の授業には「どちらかというに進んで取り組んでいる」と答えているが、「先生や友達に分かりやすくはっきりと話していますか」との質問には「どちらかといえばしていない」と答えている。恥ずかしさが先に立ち、間違えないようにと気を取られるばかりに、はっきりと声を出したり、アイコンタクトをしたりするなど相手に分かりやすい態度で発話することができないことが多い。話を聞きたいと思っている相手の気持ちや状況を伝え、活動の目的を明示することによって、自分の考えを相手に伝えたいという気持ちを引き出し、発話しようとする意欲を高め、自ら進んで考えながら相手に分かりやすくコミュニケーションを図れるようにしていきたい。
B (男)	外国語の学習は大切だと思っているものの、外国語の授業のゲームが楽しいと感じてしまっている。また、クラス全体で歌やチャンツの練習をするときにふざけたり、しっかりと声を出して取り組んでいなかったりする姿がよく見られる。外国語の学習は「どちらかといえばきらい」と答え、授業も「楽しくない」と答えている。また、外国語の授業に「どちらかといえば進んで参加していない」、「先生や友達に分かりやすくはっきりと話しているか」との質問には「どちらかといえばしていない」と答え、英語で伝えることに対して消極的な態度である。話を聞きたいと思っている相手の気持ちや状況を伝え、自分が相手を喜ばせることができることに気付かせ、自分が本当に伝えたいと思うことを選ばせることによって、相手に伝えたい思いを十分持たせたい。そうすることで、自ら進んで考えながら相手のためにコミュニケーションを図ろうとする態度を育みたい。

4 評価規準

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度【コ】	○ ALTのために、紹介したいテレビ番組の放送される曜日や時刻を英語で分かりやすく伝えようとしている。
外国語への慣れ親しみ 【慣】	○ 時刻について尋ねたり、答えたりしている。 ○ 数字（1～12、30）やA.M.・P.M.を用いて時刻を表している。
言語や文化への気付き 【言】	○ 世界には時差があることに気付いている。 ○ アルファベットの名称の読み方を聞いて、どの文字か分かる。

5 指導計画（全5時間予定）

資料参照

VI 研究の結果と考察

1 「相手の望み」を設定することによって、相手の知りたいことが明らかになると、相手のために何かを伝えようとする目的意識が生まれ、既習の知識・技能や経験を生かしながら、自分の考えや気持ちを伝えようとする態度を育むことに有効であったか。

(1) 全体の状況

児童は、来日2年目で日本のことをもっと知りたいと思っているALTが日本でさらに楽しく生活を送るために、日本のテレビ番組をぜひ見てほしいと、自分の好きなテレビ番組やALTが好きそうな番組を自作の紹介カードを見せながら紹介した(図1)。紹介カードには自分が知っている番組の内容やその面白さが伝わるような絵や言葉をかいており、どうにかして日本のテレビ番組の面白さを伝えたい、

ALTに日本のテレビ番組を見てほしいという児童の気持ちがうかがえた(図2、3)。ALTはその絵を見て、“Nice”と褒めたり、“I like it, too.”と反応したりしたので、児童はとてもうれしそうだった。事後アンケートでは、約95%の児童が「ALTの先生のために自分の知っていることを伝えようとした」と答え、約93%の児童が「ALTに喜んでほしいと思いながら紹介した」と答えた。そういった思いを感じたALTからの感謝の言葉を聞いたり、握手をしたりしたときの児童はとて満足そうな様子だった(次ページ図4)。「相手の望み」を明確に設定することで、相手のために何かを伝えたい思いを持ち、自ら進んで考えながら自分の考えや気持ちを表現しようとする姿がほとんどの児童に見られた。

(2) 抽出児童の状況

抽出児AもBも、テレビ番組を紹介したときはALTを前に緊張していたが、自分の紹介が終わるとうれしそうに

ALTと握手し笑顔がこぼれていた。実践前のアンケートでは「授業の中で楽しいと感じるとき」は二人とも「ゲーム」と答え、ゲームの勝敗に楽しさを感じていた。しかし、今回の活動が楽しいと感じたときを抽出児Aは「ALTに紹介しているとき」、抽出児Bは「あく手したとき。緊張した



図1 ALTに紹介している様子



図2 紹介カード①

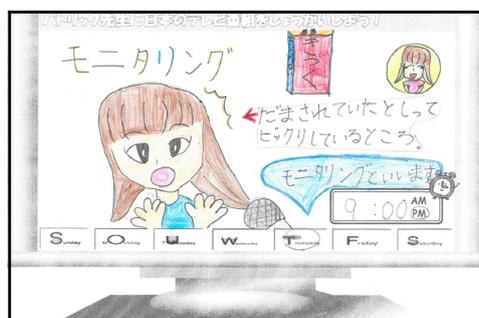


図3 紹介カード②

けど、ALTの先生も自分の紹介した番組が好きだったことがうれしかった」と答えている。抽出児らは今回の活動で「ALTの先生のために日本のテレビ番組を紹介する」という目的の達成をALTからの感謝の言葉や握手で感じることができ、ALTの喜ぶ様子を見たり、自分と同じものが好きなことを知ったりして関わりを深められたことが楽しいと感じているのではないかと考える。このように、「相手の望み」を明確に設定することで、児童は目的を持って英語を使うことができ、相手のために進んで自分の考えや気持ちを表現しようとする姿が見られた。



図4 紹介後に握手する児童とALT

2 「実在の相手」を活用することによって、相手の人物像が明らかになると、その相手に合わせて分かりやすく伝えようとする相手意識が生まれ、円滑に関わることができるよう相手に配慮しながらコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことに有効であったか。

(1) 全体の状況

外国語活動において「分かりやすくはっきりと話していますか」との問いに「(どちらかといえば)分かりやすくそうとしている」と答えた児童は実践前が約84%であったのに対し、実践後には約90%になった(図5)。今回の活動後、「分かりやすく」するための工夫について質問すると、声の出し方や視線、紹介カードの扱いについてほとんどの児童が意識して取り組もうとしていた(図6)。「実在の相手」を活用することで、ほとんどの児童が円滑に関わるために工夫して言葉のやり取りをしようとしていたと考える。「ALTの先生がハリー・ポッターが好きだから」という理由で、ハリー・ポッターを放送する「金曜ロードショー」を紹介する児童が何人もいた。伝える相手が児童がよく知っている実在の人物だからこそ、すでに知っている様々な情報からALTのために自ら進んで考えて番組を選んだと考える。「実在の相手」を活用することで、児童は様々な視点から相手に配慮しながら情報を選択したり言葉のやり取りを行ったりすることが分かった。

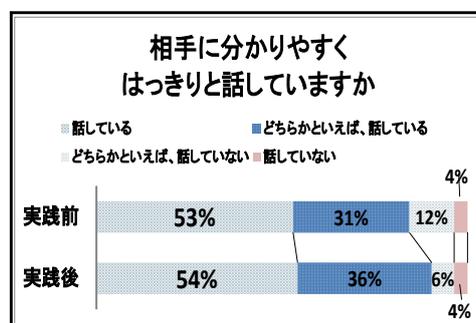


図5 話す活動に関する意識の変容

(2) 抽出児童の状況

実践前の外国語活動に関するアンケートにおいて「授業で、先生や友達にどちらかといえば分かりやすくはっきりと話していない」と答えていた抽出児Aは、今回の活動ではALTと目をしっかり合わせ、紹介カードを見せながらはっきりと話していた。事後アンケートでは「間違えないようにはっきりと話そうと考えながら取り組んでいた」と答え、その後、はっきりと話そうとした理由を「ALTの先生に伝わらないと嫌だから」と話していた。「実在の相手」を活用することで、実際に存在する相手との本物のやり取りとなり、考えを相手に正確に伝えたいという気持ちが引き出され、相手に分かりやすく伝えようとする態度につながったと考える。

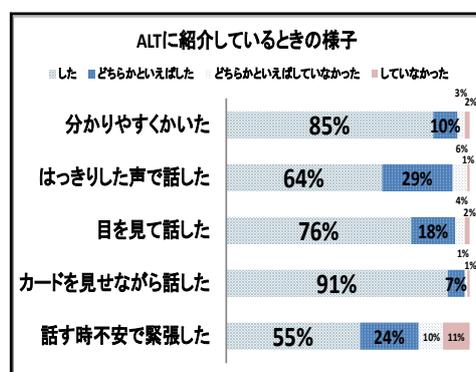


図6 ALTに紹介しているときの様子



図7 紹介カード③

抽出児Bは、紹介カードに番組のキャラクターを丁寧に描いていた(図7)。さらに、番組名は

ALTでも分かる平仮名や片仮名で書くように伝えてあったのだが、わざわざ英語でも書いていることから、自分の考えを伝えたい気持ちが自ら進んで英語を書いてコミュニケーションを図ろうとする態度を生んだと考えられる。外国語活動に対して消極的な抽出児Bであったが、事後アンケートから「カードを分かりやすくかこうとしていた」のはもちろんのこと、「はっきりとした声で」、「カードを見せながら」、「ALTの目を見て」「分かりやすく伝えようとしていた」と答えている。「実在の相手」を活用することによって、相手を意識してコミュニケーション活動に取り組もうとしていた。架空の相手ではない実際に存在する相手に自分の考えを伝える活動を設定することで、相手に合わせて分かりやすく伝えるために自ら進んで自分ができることを考えながらコミュニケーションを図ろうとする行動が見られたのではないかと考えられる。

3 「英語話者」を活用することによって、英語を使う必然性が生まれ、自分の知っている英語を駆使して自分なりの言葉でコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことに有効であったか。

(1) 全体の状況

日本のテレビ番組をALTに紹介する時、番組名以外、日本語を使う児童は一人もいなかった。言いたい英語がすぐに出てこなくても、頭の中で数を唱えたり、紹介カードの絵を指したりしてALTに日本語を使わず、英語やジェスチャーでなんとか伝えようとする姿が見られた。番組名とともに、番組の種類を“Animation”などと伝えた児童もいた。事後アンケートより「自分なりに英語を使おうとしていましたか」という問いに対しても、約97%の児童が「英語を使おうとしていた」と答えている。「英語話者」を活用することによって、児童は自分なりに英語を用いてコミュニケーションを図ろうとしていたと考えられる。

普段あまりALTと1対1で話したことがないので、約79%の児童が「ALTにうまく伝えられるか不安で緊張した」と答えているが、「またALTと1対1で英語で何か話したいと思えますか」という問いでは、約92%の児童が「また話したい」と答えている。このことから、「英語話者」とのコミュニケーション活動を繰り返し経験していけば、緊張や不安も和らぎ、「英語話者」と話すことにも慣れ、児童がますます自ら進んで考え、自分自身の言葉でコミュニケーションを図ろうとすると考える。

(2) 抽出児童の状況

抽出児Aは、紹介前に自分の言いたい表現“Movie show”を担任に確認していた。そして、ALTに「金曜ロードショー」を紹介してから“Movie show”と番組の種類を伝えた(図8)。

ALTに英語で自分の考えを詳しく伝えたい気持ちがうかがえた。その気持ちが自ら進んで考えて英語の表現を知ろうとする姿、また、自分が伝えたいと思うことを英語を用いて伝えようとする姿につながったと言える。

また、英語に自信がなく、あまり英語で話そうとしない抽出児Bであったが、紹介後、ALTの“Thank you”に対して、照れながらも“Thank you”と答えていた(図9)。「英語話者」を活用することで、その場面に英語を使う必然性が生じ、自ら進んで考えて自分なりの言葉でコミュニケーションを図ろうとする態度が見られたと考える。

T:Hello.
S:Hello.
T:What TV show do you like?
S:I like Kinyo Roadshow.
T:Ah, nice.
S:Movie show.
T:Ah, movie show.
What day?
S:Friday.
T:What time?
S:9:00 P.M.
T:Good. Nice job.

図8 抽出児A(S)とALT(T)の会話

T:(手を上げて)Hi, B.
S:(照れ笑いしながら手を振る)
T:What TV show do you like?
S:I like Pocket Monster..
T:Wow, me too.
What day?
S:Tuesday.
T:What time?
S:7:00 P.M.
T:O.K. I'll watch it.
Very good.
Thank you, B.(握手)
S:Thank you.(照れ笑い)

図9 抽出児B(S)とALT(T)の会話

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

- 相手に喜んでもらおうと自ら進んで考え、自分なりの英語で、より分かりやすく伝えようとする児童が9割を超えた。
- 「相手の望み」を設定することによって、相手のために何かを伝えようとする目的意識が生まれ、自分なりに自分の考えや気持ちを表現し、自分の思いが通じた成就感や相手に感謝されたり相手との関わりを深めたりした喜びや有用性を感じることができた。
- 「実在の相手」を活用することによって、児童は相手に分かりやすく伝えようと、声の出し方や視線、ジェスチャーなどを意識しながら取り組むだけでなく、円滑に関わるために相手に合わせて伝える内容や手段などについても配慮しながらコミュニケーションを図ろうとしていた。
- 「英語話者」を活用することによって、英語を用いる必然性が生まれ、児童が伝えたい表現を探したり、自分の知っている言葉を駆使したりしながら、児童は英語を用いて自ら進んでコミュニケーションを図ろうとしていた。

2 課題

- 言語材料が十分習得されていない児童は、理解不足や練習不足のためALTと1対1で話すのは難しいと感じている。児童自ら進んで考えを伝えられるように、英語に慣れ親しむ活動の充実が重要である。
- ALTなどの英語話者との1対1の会話に対して、多くの児童はうまく伝わるか不安や緊張を感じていた。しかし、実際に存在する英語話者との会話の積み重ねにより、不安や緊張も和らいでいくのではないかと考える。

Ⅷ 提言

外国語活動において、児童が自信を持って英語でコミュニケーションを図ろうとするためには、言語材料に慣れ親しみ、体験的な活動で理解を深める時間を十分確保することが必要である。そして、単元末に目的意識と相手意識を明確にした英語を使う必然性のある場面を設定し、児童が伝える内容や伝え方について自ら進んで考えながら英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育むことが大切である。

<参考文献>

- ・文部科学省 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』(2008)
- ・文部科学省 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』(2017)
- ・国立教育政策研究所 『小学校英語教育に関する調査研究報告書』(2017)
- ・群馬県教育委員会 『平成29年度学校教育の指針(解説)』(2017)
- ・上智大学CLTプロジェクト 編 『コミュニケーション型英語教育を考える』アルク(2014)
- ・アレン 玉井光江 著 『小学校英語の教育法』大修館書店(2010)
- ・伊東 治己 著 『フィンランドの小学校英語教育』研究社(2014)
- ・金森 強 著 『小学校外国語活動 成功させる55の秘訣』成美堂(2011)
- ・直山 木綿子 編 『小学校外国語活動のツボ』教育出版(2014)
- ・教育課程研究会 編 『アクティブラーニングを考える』東洋出版社(2016)
- ・鈴木 義幸 著 『「ほめる」技術』日本実業出版社(2002)

<担当指導主事>

永井 直樹 町田 邦江